

腎細胞癌の膀胱転移の1例

東海大学医学部附属東京病院泌尿器科 (医長: 松下一男)

谷川 克己, 松下 一男

BLADDER METASTASIS FROM RENAL CELL CARCINOMA
THREE YEARS AFTER NEPHRECTOMY

Katsumi Tanikawa and Kazuo Matsushita

From the Department of Urology, Tokai University School of Medicine, Tokyo Hospital

A 47-year-old man presented with gross hematuria. He underwent right nephrectomy for renal cell carcinoma (clear cell subtype, pT1N0M0) three years ago. Cystoscopy revealed a solitary, non-papillary tumor in the middle of the interureteric ridge. Transurethral resection of the tumor was done. Histological diagnosis was renal cell carcinoma (clear cell subtype). This was considered to be a metastatic tumor from the renal cell carcinoma treated three years earlier. This case may represent a so-called latent distant metastasis.

(Acta Urol. Jpn. 36: 927-929, 1990)

Key words: Renal cell carcinoma, Bladder metastasis

緒 言

腎細胞癌は肺, 肝, 骨など全身各部に遠隔転移をきたしやすい。しかし膀胱などの下部尿路に転移することはきわめて稀である。今回われわれは腎細胞癌手術3年後に膀胱転移をきたした症例を経験したので報告する。

症 例

患者: 47歳, 男性

主訴: 肉眼的血尿

既往歴: 1986年右腎細胞癌にて腎摘出術 (他院にて施行。病理結果は renal cell carcinoma, clear cell subtype, pT1N0M0)。1987年肝炎。

家族歴: 特記すべきことなし。

現病歴: 1989年1月2日より肉眼的血尿が出現し1月4日当科を受診。ただちに膀胱鏡検査を施行したところ膀胱内尿管口間隆起のほぼ中央に小指頭大, 表面平滑な非乳頭状の隆起性腫瘍が認められたため1月10日手術目的で入院した。

入院時現症: 血圧 132/80 mmHg, 表在リンパ節触知せず。上腹部正中に手術痕癢を認める以外胸腹部に異常所見なし。

入院時検査成績: 末梢血液像および血液生化学に異常なし。CEA, 1.1 ng/ml, CA 19-9, 9 U/ml, 尿所

見: 潜血 (卅), 赤血球: 無数/hpf, 胸部 X-P 上異常なし。IVP では左腎, 尿管には異常なし。またRPでも右遺残尿管には腫瘍等の異常は認められなかった。

超音波検査では膀胱内に偏平な腫瘍状隆起を認めた (Fig. 1)。

入院時経過: 1月11日 TUR-Bt を施行した。組織診断は renal cell carcinoma で腫瘍は粘膜固有層に存在し, 表面は移行上皮に覆われていた。clear cell subtype, alveolar type, grade 1 であった。切除標本からは周囲組織への浸潤の有無は不明であった (Fig. 2)。

術後経過良好にて3日目に退院した。現在外来にて interferon α の投与を施行しているが再発や他への転移等はみられていない。

考 察

腎細胞癌の膀胱転移はきわめて稀であり, 臨床的に診断されたものは本邦では文献上自験例を含めてわずか9例の報告があるにすぎない (Table 1)。大越ら¹⁾は409例の腎細胞癌の剖検をまとめ10例 (2.4%) に膀胱転移を認めている。また Saitoh²⁾ は1451例の腎細胞癌剖検例中23例 (1.6%) に膀胱転移を認めている。腎細胞癌の膀胱への転移経路は血行性, リンパ行性に加えて尿流による播種が考えられる。腎細胞癌でも尿

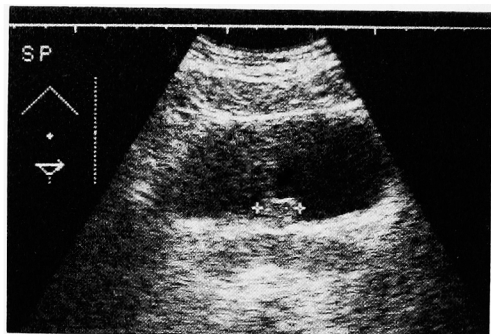


Fig. 1. 膀胱部の超音波検査・膀胱内に腫瘍状隆起病変を認める

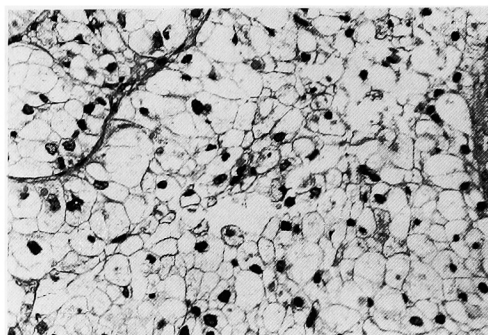


Fig. 2. 病理組織学的所見・腎細胞癌 (clear cell subtype)

Table 1. 腎細胞癌の膀胱転移の本邦報告例

症例	報告年度	年齢	性別	主訴	腎癌側	発生部位	腎癌発見からの期間	他臓器転移	治療	病理 (subtype)	文献
1	1961	66	男		右	後壁	1年	肺	部分切除	不明	日泌尿会誌 52, 94
2	1967	12	男	腹痛, 血尿, 頻尿	右	右尿管口上縁	同時	無	部分切除	clear cell	日泌尿会誌 58, 1181~1182
3	1969	52	男	血尿	右	右尿管口	4ヶ月	骨	部分切除	不明	日泌尿会誌 60, 704
4	1980	57	女	血尿	右	右尿管口上方	6年	無	部分切除 残尿管切除	clear cell	臨泌 34, 377-380
5	1984	64	女	血尿, 熱	右	三角部中央	8ヶ月	無	TUR	clear cell	泌尿紀要 30, 249-252
6	1985	65	女	血尿	右	右側壁	同時	無	TUR	clear cell	日泌尿会誌 76, 454
7	1985	63	男	血尿	左	左尿管口	同時	肺	TUR	不明	日泌尿会誌 76, 1250
8	1987	62	男	血尿	右	頂部	同時	無	TUR	clear cell	日泌尿会誌 78, 176
9	自験例	47	男	血尿	右	三角部中央	3年	無	TUR	clear cell	

中に腫瘍細胞が証明されることもあり³⁾, 腎杯, 腎盂粘膜に進展するような腫瘍では播種の可能性は高くなってくるものと思われる。膀胱への転移部位が腎細胞癌と同側の尿管口付近であるものは9例中5例である。腎盂腫瘍の場合, 膀胱腫瘍の発生は患側の尿管口付近に多くみられるという報告もあり⁴⁾。これらの5例は尿流が転移経路である可能性も高いものと考え。血行性転移の場合は大循環にのり全身に転移する場合と腎周囲の静脈を介する経路が考えられる。特に腎静脈が腫瘍によって圧迫されたり腫瘍塞栓により閉塞された場合には尿管静脈も側副血行となりこれを介して膀胱に至る経路が予想される。ただし静脈の側副血行を介する場合を考えると静脈と左腎静脈の解剖学的関係より尿管や膀胱への転移は左腎細胞癌に多く見られることが予測される。しかし実際には本邦9例の報告例をみると8例は右腎細胞癌であった。逆に欧米の文献では左腎細胞癌の方が多く静脈の側副血行の転移経路が示唆されるという報告もある⁵⁾。膀胱以外の他臓器に転移が同時にみられたものは9例中3例あり, これらは大

循環を介する血行性転移の可能性が高い。その他の6例では腫瘍血栓や側副静脈の発達等は見られず, この経路を介して転移した可能性は低いのではないかとと思われる。またリンパ行性については, 腎のリンパ系は腎静脈に沿って腰リンパ節 (大動脈周囲リンパ節) に流れるが, 明らかなリンパ節転移がない場合リンパ流が膀胱まで逆流することは少ないものと考え。以上より腎細胞癌の下部尿路への転移経路を考えた場合尿流による播種か大循環を介する血行性転移の可能性が大きいものと思われた。

転移性膀胱腫瘍の立場からみると原発巣で最も多くみられるものは胃癌, 悪性黒色腫, ついで乳癌, 肺癌, 膀胱癌等であり, 腎癌からの転移というのは稀である^{6,7)}。これらの大部分は血行性の転移である。

腎細胞癌の発見から膀胱転移の診断までの期間を見ると大部分は同時期から1年以内である。しかし自験例は腎摘出後3年目に, 症例4は6年目に膀胱転移が認められた。特に両症例とも腎細胞癌は stage 1 であり根治的手術がなされたにもかかわらず数年も経て

から転移が発見されている。その他, 腎癌摘出後数年から十数年経て骨, 肺, 筋, 皮膚などに転移をきたした症例も報告されている⁸⁻¹⁰⁾。これらに対して阿らは潜在性遠隔転移 (latent distant metastasis) という表現をしており⁸⁾ 頻度は少ないが腎細胞癌の特徴のひとつともいえる。逆に原発巣の進行が異常に遅いものや, 原発巣摘出により転移病巣が縮小したり消失するものが時にみられることがあるが, これらはいわゆる潜在性遠隔転移と同様に癌と宿主との関係, 特に腫瘍免疫の問題から興味あるところである。いずれにせよ腎細胞癌患者の場合頻度は少ないといえ本症例のように術後長期間を経てからの遠隔転移もありうるので長期間にわたる注意深い経過観察が必要である。

本論文の要旨は第 465 回日本泌尿器科学会東京地方会にて発表した。

文 献

- 1) 大越正秋, 長谷川 昭: 腎腺癌の臨床病理学的統計. 日泌尿会誌 59: 1105-1116, 1968
- 2) Saitoh H: Distant metastasis of renal adenocarcinoma. Cancer 46: 1487-1491, 1981
- 3) 里見佳昭, 高井修道, 近藤猪一郎: 腎細胞癌における尿細胞診の検討. 臨泌 33: 445-449, 1979
- 4) Williams CB and Mitchell JP: Carcinoma of the renal pelvis: a review of 43 cases. Br J Urol 45: 370-376, 1973
- 5) Remis RE and Halverstadt DB: Metastatic renal cell carcinoma to the bladder: case report and review of the literature. J Urol 136: 1294-1296, 1986
- 6) Sheehan EE, Greenberg D and Scott R: Metastatic neoplasms of the bladder. J Urol 90: 281-284, 1963
- 7) Ganem EJ and Batal J: Secondary malignant tumors of the urinary bladder metastatic from primary foci in distant organs. J Urol 75: 965-972, 1956
- 8) 岡 直友, 長谷川辰寿: 転移からみた腎癌の臨床成績について. 日泌尿会誌 59: 311-322, 1968
- 9) 南 武, 増田富士男, 佐々木忠正: 腎細胞癌の臨床的研究. 日泌尿会誌 66: 474-484, 1975
- 10) 金村三樹郎, 多胡紀一郎, 村山猛男, 河辺香月, 上野 精, 新島端夫: 腎癌摘除後18年経過して皮膚, 肺, 他側腎に転移したと思われる1例. 臨泌 34: 1089-1092, 1980

(Received on November 9, 1989)
(Accepted on March 5, 1990)